

〈学びの教室コラム〉「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト 理想の教師像についての一考察

滝波佑介

はじめに

この度、鳥取大学の学生向けに、「学級経営」についての講義をする機会を得た。自身の実践を振り返る中で、改めて「教師」という仕事について見つめ直す契機となった。

現在、教育は様々な面において「変革期」にある。情報や技術の急速な進歩は、社会生活を多様化させており、子どもたちを取り巻く環境を劇的に変化させつつある。こうした影響により、「教育活動やそれに携わる教師の在り方」も新たな局面を迎えていることは明らかである。現場の教師はもちろん、これから教師を目指す学生たちも、目まぐるしく変化する学校現場や子どもたちを取り巻く環境の中で、「教育や教師の理想像」に対して、自らが大切にしたいことは何かを日々、考えていくことだと思う。自分自身もそうだ。しかし、「理想」とは一人一人の教師がそれぞれもつものであり、決して「正解」があるものではない。ただし、「不易と流行」という言葉が示すように、教師としては、やはり大切にしたい点があることもまた事実である。

そこで、次のように自身が理想とする教師像についての一考察を述べる。

1 前提として

様々な社会的活動をAIが代行するようになってきている。しかし、教育を行う主役は人間であると考えている。「人間を教育するのが人間」であるならば、教師に「優れた人間性」が問われるのは当然と言える。したがって、「理想の教師像」を考える際には、「人間性」がキーワードとなると感じる。

2 理想の教師像に近づく3つの柱

①「目の前の子どもと向き合う姿勢」

「人生は学びの連続である」という言葉を聞いたことがある。その言葉が示すように、人は生きる上で多くの知識や技術を身に付けていくが、その獲得は自らの学習によることが大半で、目の前の子どもの実態を無視して植え付けた学びは、子どもたちにとって無意味な学びとなることが多い。そう考えるならば、教師にとって大切なことは、目の前の子どもに応じた学びの「種まき」をいかにするかであり、どう「学ばせる」か、その方法を「身に付けさせる」か、身に付けようという意欲を「もたせる」かにある。

同時に、子どもは一個の多様な存在であり、途上の過程で多くの失敗をする、白と黒の両方を経験しながら、成長していくことが当然であるという視点も必要だ。目の前の子どもたちの多様な現実を知ることにも努め、そこから逃げずに、子どもの成長を信じて、「種まき」というメッセージを届け続けることこそ、教師がもつべき姿勢と考える。

次に紹介するのは、勤務校の校長が示された言葉である。なお、自身の考察も加えて記述をする。

○「愛情」と「言葉」と「時間」の「子ども3かけ」を意識した教師に—。

「愛情」とは、すべての子どもを一人の人間として大切に扱い、児童理解に努め、決して児童に責任を求めて逃げることなく、溢れる愛情を注ぐこと。「言葉」とは、届く言葉を探り、届ける場面を捉え、どのように届けるかを練ること。医者は薬で人をよい方向に導く、教師は言葉で子どもを導く。教師の処方箋は言葉である。

「時間」とは、気づき、成長するスピードは人それぞれであることを理解し、粘り強く、成長を信じて子どもたちに関わること。その3つの姿が、子どもの心に映り、奥深く訴えるものを生む。子どもを育てると同時に、教

師自身も子どもと共に伸びる教師でありたい。

②「専門性の追求と人間関係能力」

学級経営が上手い教師は、親や子からの信頼感が厚い。信頼関係を構築するには「人間関係能力」に併せて、専門的な知識や、深い人生経験、あらゆる分野への好奇心や、新たな領域へと向かう行動力も欠かせない要素になると考える。

教育活動における自分の得意分野に対してこだわりをもち、時間をかけて追究することで専門性が次第に身に付いていく。一朝一夕で身に付くものではないし、どれだけやったら完璧というものでもない。時間的にも精神的にも、ゆとりをもって学び続けることが大切だ。第一人者の話を聞いて先行事例を真似るだけでなく、自身で行い、周囲に意見を求めていく。追求する姿勢が大切である。

また、人間性を磨くために、多くの人々と接し、多様な価値観、生き方を学ぶとよい。何事にも挑戦し、体験を通して学ぶ。子どもたちと同様に、失敗から多くのことを学び成長する。それが、教員自身の魅力や狭い視野で物事を判断しないことにつながる。

③「何事も『共有する』という意識」

「地域」に「家庭」があり「学校」がある。

現在の教育現場で求められていることは、「共有する」ことであると思う。そのために、教師としては以下の点に注意したい。

組織の一員としての公僕性に鑑み、教師一人で子どもを育てると考えないことが大切だ。子どもをよりよく育てる、また、自身が組織人として成長していくためには、自分や子どもたちを取り巻く人（同僚、家庭、地域）と力を合わせて育てるという意識が必要だ。そうすることで、指導に「互助性」が発揮され、「厚み」が増す。役割分担を明確にすることで、指導に「余裕」が生まれる。その「余裕」が、子どもに対する場面での態度にも現れる。結果、指導の「効果」自体が高まる。

それを可能にするには、教師自身が「つながりの中で自己の役割を認識した行動」をする経験を積むこと。そして「社会人」としての人間関係の在り方を身に付けていくことが重要である。次に紹介するのは、勤務校の教頭から学んだ教訓及び自身の考察である。

○「独断を避ける。管理職および保護者への連絡はなるべく早く。『途中報告の原則』が大切だ。」

いかなる場合でも組織の一員として活動することを勧めたい。自己中心的な視点ではなく、全体の中での自分の在り方を問うことで、教師としての自己を深めるとともに、指導の技術や効果を高めていくことができる。

3 最後に

「人間性」をキーワードにしてこれまで述べてきたが、それは人の内面に由来するものであり、非常に曖昧で、何をどのようにすればよいか分かりにくいことは確かである。特に、教師は「大人」であるため、人格としては、もうすでに完成に近い状態にあるとも考えられる。したがって、教師自身の「人間性」を変えること、成長させることは簡単なことではないと言える。

ただ、教師にとっての「不易」、目指すべき優れた人間性というのは、「常に子どもの目線や立場に立って、物事を判断して行動できるということ」ではないだろうか。それを核にした、「一人の人間としての在り方」が教師としての「人間性」であり、同時に、その人間性が目の前の子どもたちへの「影響力」となって現れるのだからいかと考える。

滝波佑介（鳥取市立賀露小学校教諭）※「学びの教室」講師